社会開発と農耕文化複合
— 進化的，生態学的アプローチ —(1)

森　　祐二
広島大学平和科学研究センター

SOCIAL DEVELOPMENT AND AGRICULTURAL COMPLEX
– Evolutional and Ecological Approach – (1)

Yuji MORI
Institute for Peace Science, Hiroshima University

SUMMARY

According to the theory of Sasuke Nakao (1966, 1967), there are four agricultural complexes in the world different in their origins : (1) agriculture of roots and tubers, (2) agriculture of savanna, (3) agriculture of the Mediterranean, and (4) agriculture of the New Continent. Fig. 1 shows their places of origin, and routes of propagation.

These four agricultural complexes whose origin was very old have developed both horizontally and vertically, but still preserve their original patterns in present days.

Horizontal development of agriculture means the cultivation of weed and wild grass, and introduction of useful plants from other agricultural complexes. As a result, more useful and better nourished plants were cultivated. Fig. 2 shows horizontal development of agriculture in East Asia. The agricultural complex of lucidophyllous forest zone is a complex of agricultures of roots and tubers, savanna and the Mediterranean. The zone spreads from the Himalayan area, through south-west and east of China, to Japan. Agri-

culture of roots and tubers, the oldest in the origin, introduced useful plants from that of savanna and the Mediterranean as is shown in Fig. 2.

Vertical development of agriculture means the integration of agriculture with cattle breeding. The Mediterranean agriculture domesticated many animals such as cows, horses, sheep, and so on. Such combination of agriculture and cattle breeding not only provided labour, but also fertilized the soil by the excrements of animals, and made human life fully nourished.

The Mediterranean agriculture, which developed north of the Alps, made a full vertical development, and as is well known, such development provided the basis of the formation of national economy.

Agricultural complex is a basis of social development. But it is only when an agricultural complex has developed both vertically and horizontally that it can function as a basis of social development.

Many, if not all, civilizations have been built upon the foundation of their own agricultural complexes. And the development of agricultural complexes (conditioned both by its natural environment and by its culture) must be based upon the four types explained above. Even the characteristics of modern civilization can be considered in this light. For instance, it is essential to analyse the relationship between modern science and technology with the agriculture upon which they are based.

References

NAKAO, Sasuke (1966) *Saibai Shokubutsu to Noko no Kigen*
(Origin of Cultivating Plants and Agriculture)
Iwanami, Tokyo
(1967) Nogyo Kigen Ron (Origin of Agriculture) in Morishita et al eds. *Shizen : Seitaigakuteki Kenkyu* (Nature : Ecological Research)
Chuokoron, Tokyo

Fig. 1 Places of Origin of Agriculture and their Routes of Propagation
(Nakao, 1966)

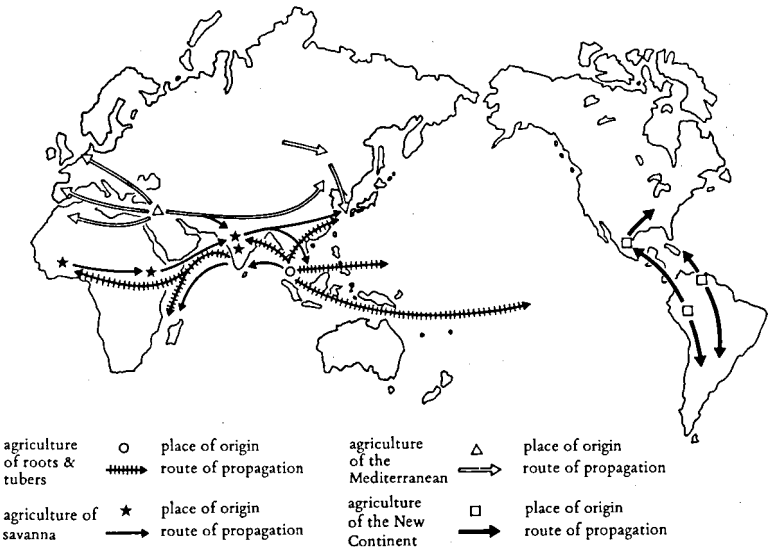
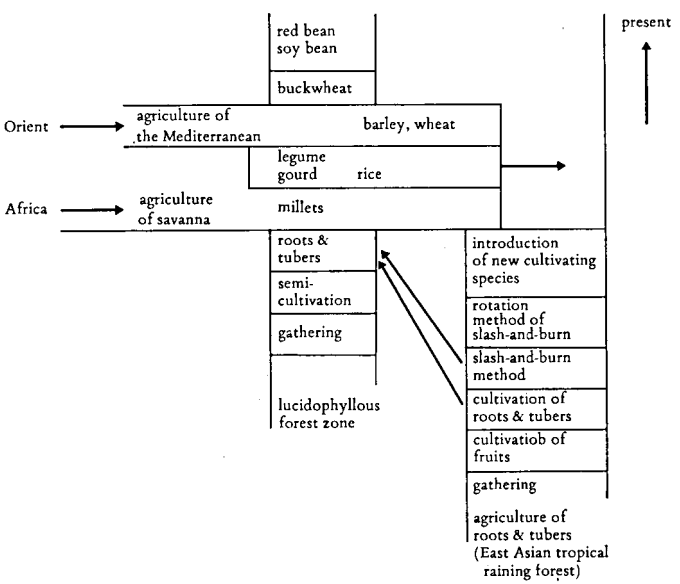


Fig. 2 DEVELOPMENT OF AGRICUTURAL COMPLEXES IN EAST ASIA
(Nakao, 1967)



序 章

1

農耕生活の開始は，人類進化の途を動物のそれから分つ決定的契機となった。身体をつくり変えることによって新しい種（species）として地球上に登場した人類は，積極的に環境に働きかけることによって，自身を変化させるのではなく，環境を変化（獣の皮で身体をおおい，住居を作り，というように）させることによって進化の途を進んだ。それは，生物進化とは異質の進化であり，文化進化と言うべきものであった。地球の生成以来，分子進化の途上で生命が発生した。[1] 生命活動をになう物質系としての生物体は，分子進化を体内にまきこみながら，分子進化とは異質の進化の途を進んだ。生物進化の理論が科学的理論として一応の完成をみたのは19世紀半ばのことである。われわれはチャールス・ダーウィンの名と共にそれを知るのである。このことは社会進化の思想と呼応する。そして，生物進化の途上における人類の発生を明らかにしたことは，生物進化論の偉大な功績であった。われわれになんらの疑いもなく，人間が生物界のひとつの種である（あるいは種にすぎない）ことをみとめている。地球上のあらゆる環境下に，熱帯から極地まで，湿潤地帯といわず乾燥地帯といわず，広く分布した人類をひとつの種，*Homo sapiens* として生存させたのは，人間の社会的生産活動であった。すなわち，その活動によって環境を変えることによって生存を全うしてきたからであった。その最も重要な活動のひとつが農耕であった。そのようなもろもろの活動の発展過程を文化進化ということができる。

ところで，進化の思想が宇宙進化から，地球進化，分子進化，生物進化，文化進化というように広大な領域にひろがり，それぞれの進化理論を編み出そうとする努力の契機ともなり，中心ともなったのが生物進化論であったことを指摘しておきたい。生物界が最も身近かな対象であったというだけでなく，地質学の発達によって化石の発見が相次いだこと，航海術の発達によって全世界周航が可能となったことなどが生物進化論形成の背後にはあった。人間社会や文化は，人間がその不可欠の構成要素をなしているために（研究）対象化することは容易でなかったばかりでなく，それらはあまりにも複雑であった。また，宇宙や地球，分子などは，19世紀の自然科学にとってはとうていそれらの進化を問題にすることので

きるような状態ではなかった。

このような，さまざまな領域における進化という現象は，宇宙に流れる時間の方向に沿った非可逆の現象である。

非常に迂遠なところからはじめたかにみえるこの議論の目的は，地球上の分子進化が生命現象を発現させて生物進化の中にいわば巻き込まれているように，生物進化の産物である人間という自然の存在が，社会進化の過程で社会の深層構造をつくるに至ったということを言いたいがためであった。人間の社会的生産活動は，自然の諸力を利用し，制御することによってはじめて可能となる。それは，人類の先祖が農耕生活をはじめた時から，今日の科学技術を駆使したさまざまな産業活動に至るまで一貫して変らない原理である。

人間の社会的生産活動としての農耕は，その起源が最も古いというだけではなく，生物体としての人間の生存にとって第1に不可欠の食料生産であったという点において，きわめて重要な活動であった。採集生活から農耕生活への転換は，自然への完全な依存から，自然への積極的な働きかけ――自然力を利用し，制御して目的とするものを生産するという――への転換であった。言いかえれば，人間の自然からの独立への第1歩であった。自然界の食物連鎖の1員として自然の秩序構造の中に完全に組みこまれていた人間の先祖は，農耕生活をはじめることによって，はじめて他の動物に食われるという食物連鎖の恐怖から脱却することができるようになったのであった。それは自然の秩序からの超越の自覚となった。他方ではもちろん，自然的存在としての人間は，依然として強く自然の秩序にしばりつけられながら生活していたはずであった。農耕という社会的生産活動は，超越的存在と自然的存在の中間にあって，その両者をつなぐ役割をもつものとしての人間を発見したのであった。農耕生活をはじめて以来，人間はこれら3者の役割を演ずることとなった。さまざまな農耕儀式の中に，このような人間の演ずる3者の役割を見出すことができる。（いろいろな犠牲や人身御供は，それがどのような神，超越者の名においてなされようとも，人間を自然の秩序のために供せられる限り，食物連鎖の1員として食われた人間と異ならない。）それは，人間にとって自己認識の偉大な第1歩であったと言えよう。しかし，その自己認識，あるいは自覚が，科学的認識でなかったが故に，多くの荒唐無稽なものを含んだ。

（科学的認識は，実践によって，すなわち自然に働きかけることによって実証される限りにおいて荒唐無稽なるものはふくみえない。しかし，“科学思想”の中に荒唐無稽なるものがないとは言えない。）宗教ばかりでなく政治権力もまた，政治権力を握る者が自らを超越者の位置に置くことによって，人間に今のべたような3者の役割を演じさせたのであった。（わが国においてはつい最近までアラヒトガミという存在があったことを忘れてはならぬ。）

農耕社会は，その生産活動によって社会的剰余を産み出した。その結果，社会的剰余の管理，所有，分配という社会的重層関係・構造が発生した。この関係が採集・狩猟社会が豊かな採集地・狩猟地を身のまわりにもつこととは全く異なることは言うまでもない。社会的剰余を産み出した社会は，また高度の社会的分業を可能とする社会となった。かくして，農耕社会は重層構造をもった社会へと変貌して行った。その社会は，一方では先にのべたように，人間存在自体にも重層性を付与するような社会であったのである。

2

農業生産は，生命維持に直接かかわる食糧生産であるという点において第1の基礎的生産活動であるだけではない。それは人間にとって最初の社会的生産活動であったという点においても社会の基底を形作るものである。だが，これらは別々にあるのではない。生命維持のために直接的に不可欠な生産活動であるが故に，人類は最初に食糧生産活動をはじめたのであった。しかも，重要なことは，人間の社会的生産活動の基底を形成する農業生産活動が，今日に至るまで，人間のさまざまな社会的生産活動を社会の深層において支え，規定しているということである。

農業生産は，気温，降水，土壌，その他多くの自然的要因によって決定づけられる。そのような諸要因によって世界の農業が特徴づけられていることは言うまでもない（このことは次節でのべる）。すなわち，生態学的に決定づけられていると言うことができる。

一方，科学技術を駆使した工業は，世界中どこにでも移転可能なものと考えられているかにみえる。工場設備をつくり，動力の供給があり，原料を運びこめば，生産活動のための労働力さえあれば生産はできるものと考えられているようにみ

える。たしかに，安価な労働力を求めて，工業は途上国にひろがっている。また一方，こうした国々にあっても輸出産業として工業の育成に力をいれる。工業だけではなく農業さえもが，商品作物の単作によって輸出産業化するのである。工業にせよ農業にせよ，このようなあり方が社会開発の起動力となりうるか。この問題を解くために，農業生産活動が社会の基底構造をなすということを出発点として，少しくまわり途をしながらアプローチをこころみたい。

人間の先祖が社会的生産活動をはじめることができたのは何よりも知能の発達の結果であった。それを身体的に言うならば，地上に平行な脊柱の先端に脳を支えることができない程に，つまり4足歩行では脳を支えることができない程に脳が発達した。2足歩行は手を解放した。手の使用は自由になった。手の自由な使用は神経系を介して大脳を刺激し，大脳はより精密な手の運動を指令し，調節できをように発達した。農耕生活は栄養状態を格段に改善した。身体の発達（脳もまた）が促進された。身体―労働―知能の発達は，かくして，相互に密接に関連しながら促進された。それは，人間にとって，自然に完全に依存した存在から，自然から自立した存在への過程であった。言いかえれば，生物進化の途から文化進化の途への転換であった。

しかし，だからといって，人間が生物界の1員であることには変りはなかった。ここに至って，人間は自然的存在でありながら自然から自立し，自然に対立する運命を荷うことになったのである。人間の本質のこの2重性は，しかし，単に並立しているのでもなければ重ね合せになっているのではない。それは重層構造をなしているのであり，一方は深層構造となって表面には現われない。

このような人間の重層構造の諸側面に関して，最初の科学的研究は人間心理の深層構造の解明であったと言ってもよいであろう。すでに広く知られているように，それはフロイトの名と共にある。フロイトが明らかにしたことは，人間の精神活動には，意識下に，無意識の広大な領域があり，その活動領域の重要性を指摘したことであった。深層心理学は本論の目的からはずれるのでこれ以上はふれないが，人間の精神活動が大脳，殊にその周辺に発達した大脳皮質の活動によるからには，大脳を媒介にして一方では人間の社会的生産活動につながるはずである。[2] しかも，すでに考察したように，人間は生物界の1員として自然的存在であると

共に，自然の諸力を利用して社会的生産活動によって自然と対立する存在となった。現在の人間生活の重要な営みはこれらの社会的生産活動であることは言うまでもない。しかし，だからといって，人間の自然的存在としての役割が減少したわけでは決してない。むしろ，それはますます増大しつつあるのが現状である。というのは，自然の諸力をますます深く，かつ大規模に利用するようになった人間の諸活動は，自然認識の深化なしには不可能であった。そして，人間自身が自然の存在であることを確認するに至ったのである（生物進化論）。それ故に，人間は，いわば人工的生活をひろげればひろげる程，自然的存在としての人間に深く根をはってゆくはずである。しかるに，たとえば，公害や，核エネルギーを爆弾として使うような，人間の社会的生産活動が人間に害を加えるようなことが多発しているのが現状である。それはあたかも，人間の活動が人間に敵対しているかにみえる。たしかに，人間にとって最大の敵は人間であるといった類の議論を見ることはまれではない。しかも，精神分析学的アプローチによって攻撃性に根拠をおいているかにみえる。[3]（公害や戦争は本論の直接の目的ではないのでここではふれない。）

たしかに，現象は人工生活の人間が自然の人間に敵対し，害を加えているようにみえる。問題を解決するためには，まず，このように分裂している人間の統一を回復しなければならない。その上に立って問題解決の途を探求せねばならぬというのが筆者の出発点である。一般的なわく組みとしては，人間と，その社会は，自然（＝生物および生物社会の１員）を深層構造にもち，表層において人工的，あるいは文化的生活を営んでいる，ということができる。

本論は，農耕文化複合を人間の社会的生産活動の深層（あるいは基底）構造として，社会開発におけるその役割を明らかにしようとする。もちろん，社会開発の中には農業開発も含まれる，農業に関していえば，それは深層としても表層としてもかかわることになる。端的に言えば，農耕文化複合を人間が農耕生活をはじめて以来蓄積してきた総体としてとらえる，といってもよいであろう。

3

中尾佐助によれば，農耕文化は次の４つの起源をもつ。[4]　(1) 根栽農耕文化　東南アジアの熱帯降雨地帯に起源し，タローイモ，ヤムイモ，サトウキビ，バナ

ナなどが主作物。 (2) サバンナ農耕文化　サハラ以南の熱帯アフリカ，インドに起源し，ササゲ，シコクビエ，ヒョウタン，ゴマなどが主作物。 (3) 地中海農耕文化　地中海東岸地方に起源し，オームギ，エンドウ，ビート，コムギなどが主作物。 (4) 新大陸農耕文化　アメリカ大陸中部・南部に起源し，ジャガイモ，菜豆，カボチャ，トーモロコシが主作物。

根栽農耕文化は，起源において最も古く，太平洋を島づたいに東方に伝播したルート，中国を東北方に伝播して日本列島に至るルート，西方にインドを経てサハラ以南のアフリカに伝播したルートなどがあるという。

サバンナ農耕文化は，サハラ以南のアフリカから東方に，インド中国を経て日本列島にまで伝播したルート，分岐してインドシナ半島を南下し伝播したルート，などがあるという。雨量の多い地帯に生育する禾本科植物であるイネは，サバンナの周辺，インド東部とアフリカの黄金海岸に近い西アフリカとの両地域で作物として開発されたという。アジアではイネは特に重要な作物となるわけだが，根栽農耕複合の影響を受けて発達したサバンナ農耕文化複合であるという。イネは湿性の雑穀である。

地中海農耕文化は，地中海気候圏を西方に伝播した。また東方に伝播して，インド北部，中央アジア，シナを経て日本列島にまで伝播した。アルプスを越えて北方に伝播した地中海農耕文化は，家畜として牛を導入して農業革命を行って産業革命の基礎をつくった。

新大陸農耕文化は，旧大陸のそれとは独立して発生し，旧大陸農耕文化の発生と発展の一部が再生されたようにあらわれるという。そして，旧大陸の根栽農耕文化とサバンナ農耕文化に対応するものは発生し発達したが，地中海農耕文化に対応するものは発生しなかったとされる。

以上ごく簡単に中尾佐助の農耕文化の起源と伝播をたどって来たが，本論の目的はこのような**マクロ**の生態学，および，その基礎の上に成立した農業生産を社会の基底（あるいは深層）構造として，社会開発の方向を探ろうとするのである。もちろん，現在の農業がここにのべたような状態にあるのではない。さまざまな作物が適応の範囲をひろげ，品種を改良して農耕文化発生時の生態学的状況を大きく変えている。このようなさまざまな作物の受容，改良を**水平的発展**とよぶこ

とにしよう。主たるカロリー源となる食物を途上国についてみると，図1に示すように，コムギ，コメ，トウモロコシ，雑穀，根栽などが，先にのべた農耕文化の起源と伝播の生態学的特徴を残しながらも，全世界に広く水平的展開をとげていることを見ることができる。（図1.と英文アブストラクトに付したFig.1を重ねるとこのことはよくわかる。）

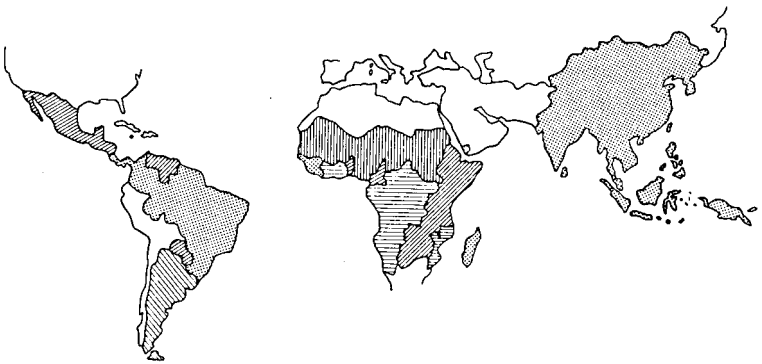


図1　途上国の主たるカロリー源となる食物パターン。□：コムギ，▒コメ，▥：雑穀，▤：根栽，▨：トウモロコシ，▧：動物質。
（Scrimshaw and Taylor : *Scientific American* vol. 243, No. 3, (1980) p. 76–78. の図を簡略化した）

農耕文化の水平的発展をみることができる。アフリカには，地中海農耕文化，サバンナ農耕文化，根栽農耕文化のパターンが，中米には新大陸農耕文化のパターンが現在に至るまで残っていることがわかる。

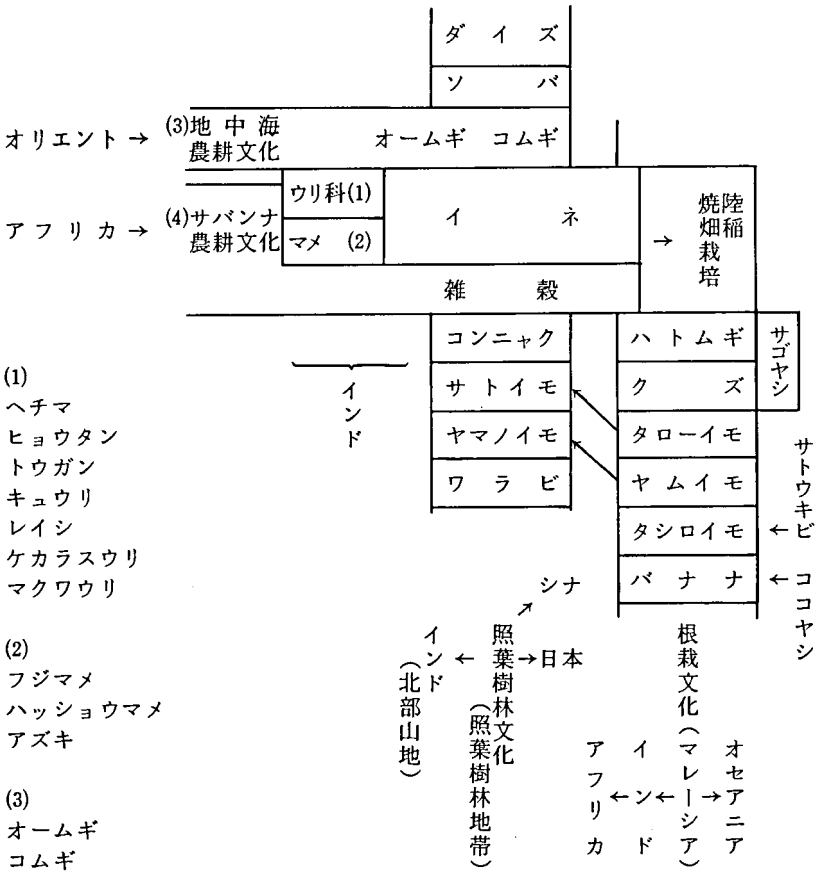
アシアの根栽農耕文化はコメを受容して米作地帯となったこともわかる。

農耕文化発展のもうひとつの途は，アルプスを越えて北方に伝播した地中海農耕文化である。再び中尾佐助によれば，家畜と耕作の有機的結合，三圃式農業がアルプス以北に展開することによって，そこに封建制社会の物質的基礎が形成されたとする。さらに，牛の舎飼い，飼料作物の開発と栽培，等々の農業革命が産業革命と共に展開する。このような農業の高度化を**垂直的発展**とよぶことにする。産業革命の基礎に農業革命のあったことは広くみとめられている。中尾の指摘は農業革命の技術的内容を明らかにし，そのことと産業革命とを結びつけた点できわめて重要であった。というのは現在，途上国開発の問題に関して，このような農業と工業との関係の分析が十分でないと筆者には思えるからである。（この点を明らかにするのが本論の目的でもある。）しかし，産業革命の展開は，決して農

業革命の技術的問題だけで説明がつくわけではない。産業革命の発展のためには周辺部に，すなわち東ヨーロッパに食糧供給地が必要であったし，原料供給源としてアフリカ，アジアにおける植民地農業を必要としたのであった。現代の途上国開発の諸問題が，産業革命の歴史を繰り返すものでない以上，また，繰り返すことが不可能である以上，途上国開発，主として工業化の問題が，その社会での農業革命の程度（あるいは段階と言いうるかもしれない）とどのように結びついているのかということを解明することは重要な課題となるであろう。農業の垂直的発展を重視する必要がここにある。農業の水平的発展は，図1の如く現代では広く世界に伝播しているとしても，生態学的制約条件を越えることはできない。ところが，工業は，資本と技術，人力等々がありさえすれば世界中どこにでも移転できると考えられているようにみえる。これは近代的思考の落し穴ではあるまいか，というのが筆者の疑問である。本論の主なる目的は，農耕文化複合を社会の深層構造として．農耕文化の水平的発展においてその社会に独自の工業化の途を，また，垂直的発展において工業化の程度を測ろうとするものである。一言にして言えば，農業と工業との相互に密接に連関した発展の途を探ろうとするにある。

社会の基底構造としての農耕文化複合の1例でもあり，また，日本をも含む東アジアの社会開発を考える上に重要な意味をもつものとして，照葉樹林帯についてふれておきたい。それはヒマラヤの南麓から東方に中国沿岸を半月形に区切り，朝鮮半島南部を含めて日本列島・本州の西半分に至る。照葉樹林帯というのは，生態学的概念であるが，それと重なって照葉樹林文化という文化的概念の基礎ともなる。[5] ここでは農耕文化の水平的発展の例示という意味も含めて，照葉樹林農耕文化複合を中尾の著書から引用して図示する（図2）。そこから容易に読みとれることは，照葉樹林農耕文化が，根栽農耕文化，地中海農耕文化，サバンナ農耕文化から作物を受けいれていることである。この照葉樹林帯の南側には，イネを受容した根栽農耕文化地帯が横たわる。北側には西方から伝播してきた地中海農耕文化の作物が栽培される。

アルプスを越えて北に伝播した地中海農耕文化は，農業革命を完成することによって国民経済の基礎を作り，その地に産業革命がおこったことは広くみとめられるところである。これと同じような意味で日本近代化の基礎に農耕文化発展を



(1)
ヘチマ
ヒョウタン
トウガン
キュウリ
レイシ
ケカラスウリ
マクワウリ

(2)
フジマメ
ハッショウマメ
アズキ

(3)
オームギ
コムギ
エンバク
エンドウ
レンズマメ
ソラマメ
アマ
Brassica

(4)
タマリンド　オイルシード
シコクビエ　ゴマ
ササゲ　スイカ
ダル　ベニバナ
チックピー　ニガーシード (*Guizotia*)
パルミラヤシ

図2　照葉樹林農耕文化の発展と外部からの影響。各作物の開発された段階を時代順に下から上に向う。（中尾佐助著「栽培植物と農耕の起源」67ページ。第16図より引用。）

位置付けて考察することはできないものであろうか。日本列島は照葉樹林文化という，さまざまな農耕文化の複合体と，より北部のヨーロッパ農耕文化の受容を可能とする地域から成り立つ。生態学的には，農耕文化のより多くの要素を受容できる有利な地位にあると言うことができよう。生態学的有利さが農業発展の1要素であることは言うまでもないが，それだけで農業革命が完成するものでもない。わが国が近代化に成功したと評価される背景にはこの生態学的有利さがかくれているように思われる。だが反面，わが国農業の不安な構造については事あるごと指摘されるところである。結論的に言うならば，農業の垂直的発展の未成熟ということになろう。そこには2つの問題があるように思われる。ひとつは農業の技術的問題。もうひとつはもろもろの社会的生産活動，社会の構造との関係における農業の位置の問題である。社会的，政治的規制が農業の上にかかるのはこの場面である。日本近代化のひずみ，あるいは不徹底，未成熟が封建的土地制度に根ざしていたことも広くみとめられるところである。それは，軍国主義大日本帝国のひとつの基礎でもあった。そして，戦後日本の経済発展のひとつの重要な基礎が農地解放であった。だが，戦後日本をとりまく国際環境は日本農業の発展に重圧となっていることを見落すわけにはゆかない。簡単に言えば，いわゆる経済摩擦のしわよせが農業におしよせているかにみえる。このことは，わが国のもろもろの社会的生産活動のあり方にかかわっていること，言うまでもない。

4

農業の水平的発展は，多くの場合作物の適応範囲をひろげて広く伝播することによっておこなわれた。農作物間の有機的結合，農耕と家畜との有機的結合によってもたらされる農耕文化の垂直的発展の場合も同じである。しかし，適応限界はすべての場合に明確なわけではない。ただ，適応限界を越えて農耕文化が伝播するものではないことだけは確かである。生態学的基礎が重要となるゆえんである。ところが，農耕文化複合の発展，あるいは，農業革命の展開には，さらに，文化的，社会－経済的規制が加って事態は一層複雑になる。そこには社会変革によって解放される部分と，それだけによっては即座には解放されない社会の深層構造とがある。社会の深層構造が人間の社会的生産活動に影響し，規制を加える。それ故に，人間の社会的生産活動は文化複合なのである。農耕文化複合とよぶ理由

もまたここにある。

工業生産活動は，農業生産とは異って，どこにでも移転できるものと考えられているようにみえる。安い労働力を求めて，資本と技術が各地に移転しているかにみえる。たしかに農耕文化複合に対応する概念は未だに見あたらない。もしそれを　に工業文化複合とでも言うならば，西欧文化がそれに相当すると言うこともできよう。そこでつくられた思想は科学技術の普遍性ということであった。しかし，産業革命が農業革命の上に成立したことは先に指摘したところであるとするならば，科学技術には特殊性の1面のあることを決して見落すことはできぬ。このように考えるならば，農・工文化複合というわく組みによって，人間の社会的生産活動の総体をとらえる必要が生ずるであろう。さらに言うならば，わく組みをひろげて，農・工・商文化複合の中で社会開発の将来像をとらえることが意義をもつことになろう。

註

1)　地球上に生命が発生した時期については，その年代はますます古いところまでたどることができるようになった。それは，岩石中の化石の痕跡によって確かめることができる。 Chris Peat and Will Dive の解説， First Signs of Life on Earth. New Scientists, Vol. 195, No. 1323, (16 September 1982) 776−781. によれば，西部オーストラリアの Pilbara 地区で発見された35億年前のストロマトライト（石灰藻起源と考えられる炭酸カルシウムーマグネシウムの同心円状の層状塊からなる石灰質岩の構造）が最古のものであるという。ちなみに，地球は46億年前に形成されたと考えられている。

2)　Freud の心理学の中には社会学との接点が十分に用意されているということを，牧康夫　フロイトの方法（岩波書店）は指摘する。“しかもそれを，ひろく生物一般の社会と個体との関係のなかで考えていく可能性がある。”（218ページ）という。この論点は，本論での筆者の立場とは異なるが，しかし，Freud 心理学の中に社会学との接点が用意されているという見解には全く賛成である。

3)　戦争について議論することは本論の主なる目的ではない。本論と同じ立場から，筆者による次の議論がある。「戦争の起源について」森利一・山田浩編　平和学講義（勁草書房）。「戦争と平和に関する二，三の考察」日本平和学会編　平和研究叢書（早稲田大学出版部）印刷中。

4)「農業起源論」森下正明，吉良竜夫編　自然−生態学的研究。中央公論社 329 − 494 ページ。

「栽培植物と農耕の起源」（岩波書店）。

前者は学術論文として，後者はその一般向けとして書かれたものであるが，前著以後の研究の発展も加えられており学術的価値においても差はない。出版時期は，「栽培植と農耕の起源」(1966) の方が早いが，「農業起源論」（1967）の方が早く執筆された。

5) たとえば，上山春平編「照葉樹林文化」，上山春平，佐々木高明，中尾佐助著「続・照葉樹林文化」（以上いずれも中央公論社），佐々木高明著「照葉樹林文化の道」（日本放送出版協会），などは手ごろな参考書である。本論では，照葉樹林文化の基礎の上にどのような社会的生産活動の将来像を描きうるかということが目的となる。